

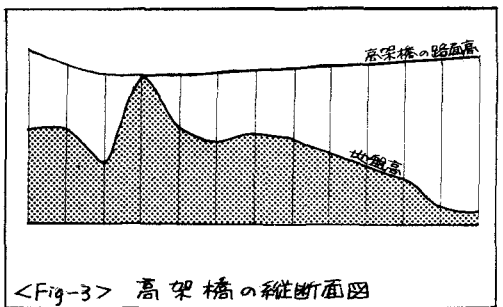
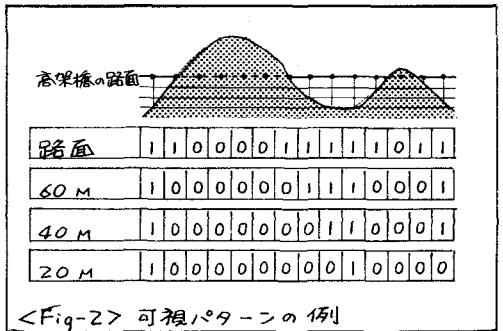
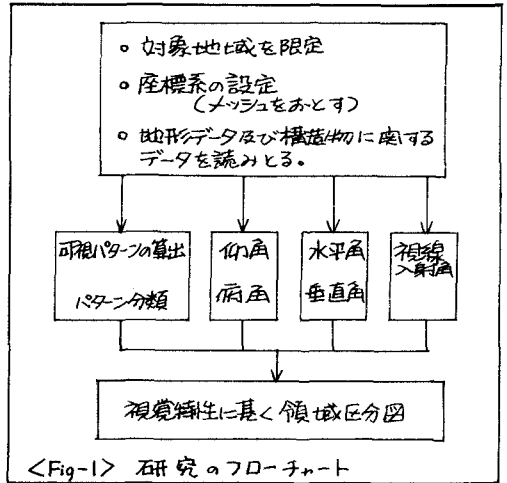
東京大学大学院 工学 細川 政弘
 東京大学大学院 工学 窪田 陽一
 東京大学 正 ハ+島義之助

□景観とは元来、対象物自身において自己完結するものではなく、視点との関係において論じらるべきものである。すなわち景観とは、対象物がみかれた「場」と「視点」との関係論としてとらえることができる。そこでこれらの関係を何らかの視覚的指標を用いて、明確な形で表現することが、後の景観評価 については設計のための基礎的データとして必要となる。本研究は、高架橋、橋梁等の線形構造物を対象とし、視覚的指標として、可視パターン、仰角等を取りあげている。これらの指標をもとに、景観的影響圏をいくつかの視覚的特性をもった領域に分割することが本研究の目的である。

□まず、対象地域を限定し、この地域内に設計路面高の変化する全長1300mの高架橋を想定した。この縦断面図の概要を<Fig-3>に示す。次に地域全体を125mメッシュに分割し格子点での地形の標高を読みとり、高架橋は100m単位に分割し、各ポイントごと(14点)の座標値と設計路面高を読みとった。次にこれらのデータをもとに可視パターンの算出を行なった。可視パターンとは、ある視点から見えるポイントには「1」、見えないポイントには「0」を与えて線形構造物の「見えの形」を幾何学的(今回は14桁)の整数として表現したものである。可視パターンの例を<Fig-2>に示す。また各ポイントごとの仰角を算出した。以上の研究のフローチャートを<Fig-1>に表わす。

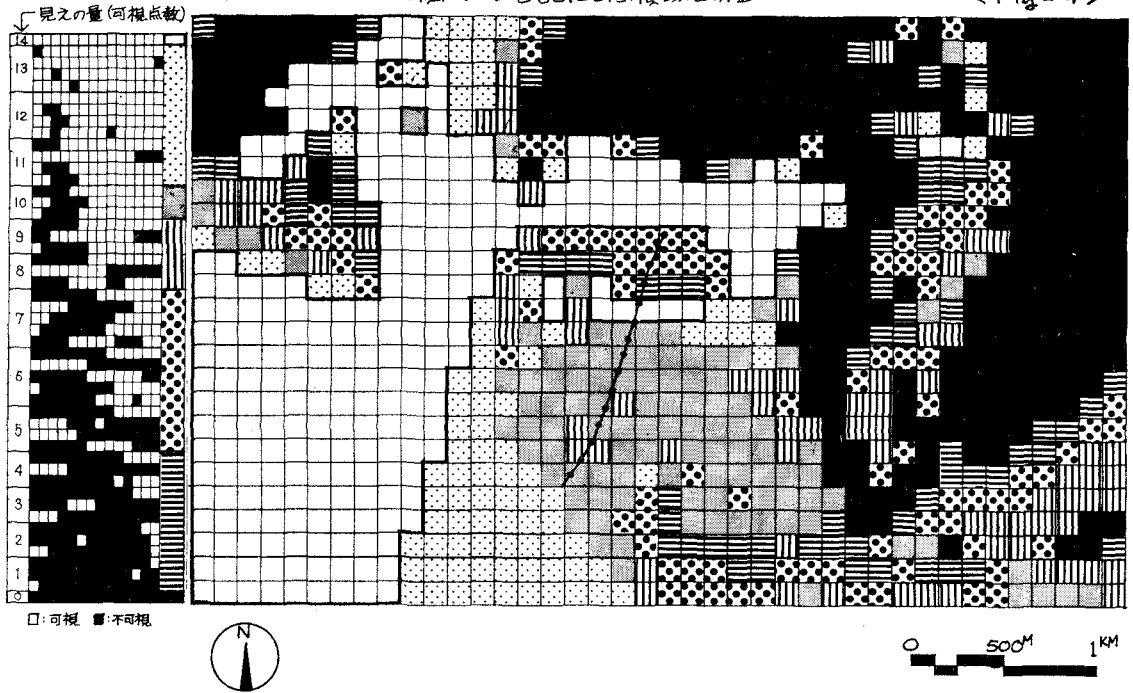
□可視パターンをもとにした領域区分図を<Fig-4>に示す。これは1000個の視点からの可視パターンを、見えの量に基いて7つのタイプに分類して表現したものである。また仰角をもとにした領域区分図を、等距離線をも併記して<Fig-5>に示す。これはひとつのポイントに対しての仰角のコンターラインを表したものであるが、最終的には、領域区分は最大仰角に基き画定されることになる。

□視覚的特性を表わす景観の解析指標として、本文では可視パターンと仰角を扱ったが、これら以外にも、水平角、垂直角、視線入射角等の指標が考えられる。また125mメッシュを用いた本研究はスケールにおける景観解析に対して有効であるが、近景領域におけるスケールで論ずる場合には、大縮尺の図面を用いて、これに適応した肉厚でメッシュを切る必要がある。これらの成果は構造物の景観設計を行なう際の「設計視点」を与えるものであり、テクスチャー、色彩、プロポーション等の検討を行なう場合に利用されることになる。



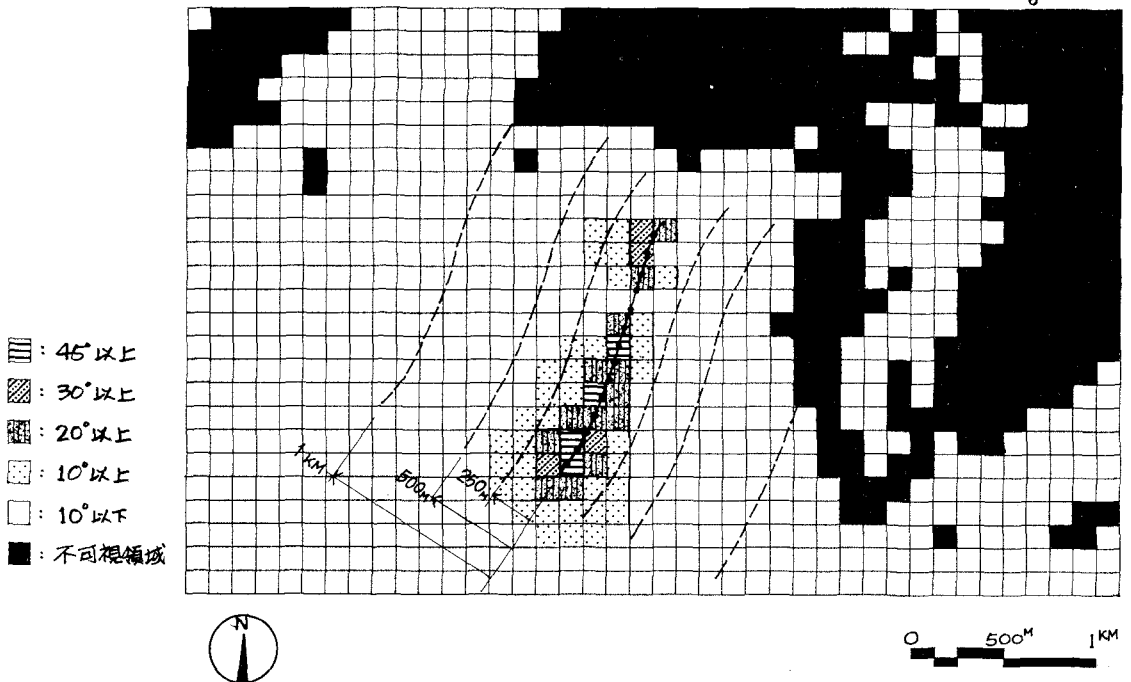
可視パターンをもとにした領域区分図

< Fig-4 >



仰角をもとにした領域区分図

< Fig-5 >



□参考文献: 佐藤博紀/自然景観計画に関する基礎的研究(1972, 東大修論), 樋口忠彦/景観の構造(1975)